

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 26 日現在

機関番号：31302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520919

研究課題名(和文) 東北地方における民俗の展開と東日本大震災

研究課題名(英文) Development of Folklore in the Tohoku Region and the Great East Japan Earthquake

研究代表者

政岡 伸洋 (MASAOKA, NOBUHIRO)

東北学院大学・文学部・教授

研究者番号：60352085

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、民俗学の立場から、以前の暮らしや他地域の事例も視野に入れつつ、東日本大震災の被災地で起こるさまざまな現象を調査検討し、新たな理解と課題を提示するものである。今回得られた知見として、震災後の早い段階から民俗行事が行われ注目されたが、これは混乱の中での必要性から、震災前の民俗を活用し、新たに創出されたものであったこと。暮らしの再建という点からみれば、4年経った被災地の現状は、やっと出発点に立った段階であり、今後もその動きを注視していく必要があること。被災体験の継承については、災害のみならず地域の歴史や暮らし全体に関心を持つ地元研究者の育成が必要である点などが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This study researches and discusses various phenomena in areas affected by the Great East Japan Earthquake in terms of folklore as well as from the perspective of pre-disaster daily life and observations made in other areas, and presents a new understanding along with issues that need to be addressed. Findings from this study include: 1) Folklore events organized in the early post-disaster phase that attracted much attention were found to be newly created amid the confusion and out of necessity, based on folklore that had existed before the earthquake; 2) In terms of reconstructing daily life in the affected areas, the current state, four years after the earthquake, is merely a starting point, and we need to continue to carefully monitor progress; and 3) We need to develop local researchers who are interested in the overall situation not only disaster-related issues, but also issues related to the community's history and life in order to pass on the experiences of the disaster.

研究分野：民俗学

キーワード：東日本大震災 復興政策 生活再建 民俗行事の復活 コミュニティの再構築 災害記憶の継承

1. 研究開始当初の背景

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震は、巨大津波を発生させ、沿岸部に甚大な被害をもたらした。その後、被災地では暮らしの再建に向けて動き出すことになるが、これに対し、さまざまな分野の研究者が、自らの学問成果を活かし役立てようという目的の下、数多く関わるようになった。

さて、このような災害状況の中で起こるさまざまな現象を対象化する場合、近年の社会科学の分野では、「脆弱性」や「回復力」に注目する傾向が顕著である。「脆弱性」に注目する研究とは、災害の場で起こり得る現象を災害因のみではなく、当該地域における日常の脆弱な部分が極端な物理的出来事によって顕在化したものとして理解するもので、そこに地域社会が内在する「回復力」によりさまざまな展開がみられるとする。このような視点の特徴としては、災害そのものに焦点を当て、そこで展開される現象の把握、そこで生じるさまざまな問題を考えようとする点があげられる(大矢根淳・浦野正樹・田中淳・吉井博明『災害社会学入門』、弘文堂、2007年。浦野正樹・大矢根淳・吉川忠寛『復興コミュニティ論入門』、弘文堂、2007年)。

一方、民俗学では、柳田國男『雪国の春』(岡書院、1928年)や山口弥一郎『津浪と村』(恒春閣書房、1943年。2011年に石井正己・川島秀一編で三弥井書店より復刊)などの研究がみられたが、その特徴として、被害の状況のみならず、そこに起こりうるさまざまな問題を、地域の暮らし、そこに暮らす人びとの文脈というものを前提に、民俗誌的な視点から考える点があげられる。一見すると、日常性に注目する点で、上記の社会科学的な視点と類似しているようであるが、災害を軸として被災地の動きを把握するのではなく、災害も含めた地域の暮らしそのものに力点が置かれている点に大きな違いがあり、被災地で起こる様々な問題をいかに理解するかという点に特徴がある。

このように、民俗学からの研究は独自の視点の提示と問題提起の可能性を持っているが、震災後の対応を見ると、その特徴を十分活かしかれたかどうか疑わしい。特に、今回の震災では、がれきが残る中、祭りや民俗芸能が次々と復活し、あたかも地域の暮らしが災害を乗り越えたかのように錯覚させ、復興への希望の象徴として注目を集めたが、本当にそうなのか再検討することは民俗学の使命でもあったはずである。にもかかわらず、文化財レスキューの方に注目が集まり、被災地で起こりうるさまざまな現象を、震災前の暮らしの特徴を踏まえつつ調査・検討し、その意味について明らかにするような研究はほとんど行われていなかったのである。

2. 研究の目的

そこで、本研究では、東日本大震災の被災地で起こりつつあるさまざまな現象を、東北

地方を対象とした現地調査に基づく具体的な資料をもとにまずは把握し、民俗学の立場からいかに理解すべきかを考えようとした。

東北地方の民俗と言えば、古いものが残っているというイメージがあるが、実は各時代の社会的背景に合わせ大きく変化していることがわかりやすく表れている点に大きな特徴があるといえる。今回の大震災もその変化の契機の一つとして位置づけられる可能性があるが、被災地での動きを災害ではなく、震災前の暮らしを軸に分析したとき、何が見えてくるのか、民俗学独自の災害研究の視点と、そこから導き出される東北地方における民俗の特質、さらには変化を前提とした新たな民俗理解の可能性を提示することを目的に、研究を開始することにした。

3. 研究の方法

本研究の中心的な作業としては、聞き書き調査やイベント等の参与観察、それを含めた暮らしを対象とした映像記録化など、現地調査によって資料を収集し、まずは民俗誌的な視点からの被災地の動きの把握を目指し、それを踏まえ分析を行うことにした。本研究では、その軸となる調査対象地として、今回大きな津波被害を出した宮城県本吉郡南三陸町戸倉波伝谷地区を取り上げている。ここは、震災前に筆者が所属する東北学院大学民俗学研究室と東北歴史博物館が3年間にわたる共同調査を実施し、『波伝谷の民俗』(東北歴史博物館、2008年)を刊行していたこともあって、震災前の暮らしの特徴を踏まえた分析が可能であったためであった。

また、民俗の変化という今回の分析の前提を具体的に明らかにするため、岩手県盛岡市の盛岡八幡宮例大祭を取り上げた。岩手県各地の民俗行事においては、震災以降、津波の被害を受けた沿岸部のみならず内陸部も含めた各地において、復興を旗印に行われることが多く、新たな展開をみせている。その点も含め、変化の視点から資料収集および分析を行った。

さらに、これらの現象を広い視野から考えるため、宮城県東松島市大曲浜地区のほか、阪神・淡路大震災の被災地である神戸市長田区や淡路市旧北淡町、また南海地震による津波の被害を繰り返し受け、かつ近いうちにその危険性が指摘されている和歌山県のうち、近世期の津波警告板で知られる西牟婁郡白浜町や「稲村の火」で有名な有田郡広川町でも地元研究者とともに、現地調査を行った。

このほか、本研究で得られた知見を広く社会や市民に知ってもらうため、学会発表や執筆業績のほか、和歌山県における災害に関心を持つ研究者との交流会や、公開講演会や公開講座、被災地支援のための市民活動のシンポジウムへの参加、市民を対象としたイベントの企画運営についても、積極的に行った点は付記しておきたい。

4. 研究成果

(1) 震災後の混乱と民俗行事の「復活」

本研究では、まずは被災地の動きを民俗誌的に把握することを第1の目的としているが、今回注目を集めた民俗行事の「復活」を軸に、震災前の暮らしの特徴を踏まえつつ、まとめると以下ようになる。

震災前の暮らしの特徴

波伝谷地区は、リアス式海岸で知られる三陸沿岸の南部、志津川湾南岸の戸倉半島に位置し、2000年のセンサスによれば、82世帯、284人が、カキ・ホヤを中心とした養殖業および農業を軸に暮らしが営まれていた。特に養殖業は盛んで、ウニやアワビ漁もあることから、昔から漁村であったように見えるが、養殖業は1960年のチリ地震津波以降とされ、それ以前は養蚕が中心であった。さらに、近世期には製塩業や山林利用が中心で、各時代のニーズに合わせ、陸上・海上を問わず、自然資源を最大限に活用し、変化の中で暮らしが営まれてきた。なお、その技術や経営方針は各家によってさまざまで、まさに個人経営のようであり、きわめて独立性が高かった点も押さえておく必要がある。

また、社会組織では、契約講の存在は注目される。祭りや生業、村落運営に深く関わり、その代表たる講長は、行政区長の任命、行政との折衝も行うなど、まさに波伝谷の代表ともいべき存在であった。総会と称される集まりは、3月第2土曜日と10月第4日曜日の年2回あり、時には激しい議論がたたかわられるなど、結衆というより各家の利害調整の場ともなっていた。

祭りで注目されるのが、春祈禱である。契約講の春の総会の翌日に行われ、春を迎えるに際して、若者たちが各家を回り、獅子舞で集落中の厄災を祓うもので、およそ全戸・全世代が関わり、異世代間の交流の機会となるなど、人々をつなぐ、波伝谷を代表する重要な行事であった。

このように、震災前の波伝谷の暮らしの特徴として、時代のニーズに合わせ各家の独立性が顕著な生業、その家々の利害調整の場としての契約講、そしてこれらの人々をつなぐ貴重な機会としての春祈禱を軸に、暮らしが営まれてきたのである。

震災後の波伝谷の動き

このような暮らしも、震災によってことごとく破壊される。1戸（全壊）を残し全戸流出、犠牲者16名、その後2名が亡くなる。養殖関係の被害は、カキ・ワカメ・ホタテだけで波伝谷を含む戸倉地区全体で約11.5億円、ホヤ等を含めるとそれ以上であった。

震災直後、近くの高台に避難していた人々も、翌日には宮城県志津川自然の家（通称、海青）に集まりはじめ、大部分が波伝谷の人であったことから、三日後には契約講長や区長を中心に作業分担がはじまり、役場職員が

来ると物資班や給食班などの役割がはっきりし、何事もスムーズにいったという。震災前の波伝谷の村落運営の経験を活かし、避難生活がスタートしたのである。

しかし、数週間経つと、この避難所が閉鎖されるとの噂が広がり、行政の指示もあって、4月4日には鳴子や登米など遠隔地への避難がはじまる。一方、波伝谷に残る人もいたことから、契約講では4月1日に講員が集まり、共有財産の定期預金を解約・分配して、一時休講となった。波伝谷の人々はバラバラの避難生活を余儀なくされるのである。

5月には仮設住宅が建設され入居もはじまるが、必ずしも集落単位ではなかった。特に、お年寄りなどが別々で暮らすのは大変で、私有地の高台でも5戸分くらいあれば建設可能だと伝わると、波伝谷にも仮設住宅を作ろうということになった。そして、提供された土地に18戸が建設され、8月に完成したのが波伝谷仮設住宅である。ここは波伝谷の人だけだったこともあり、集会所は各仮設住宅等に分散した人も利用することになる。人々を再び結びつける場が誕生したのである。

このような状況の中、高台移転をどうするかも重要な関心事となる。行政との折衝等、やはり契約講が必要ということになり、10月には臨時総会が開催される。新役員を選出し、2012（平成24）年3月4日には春の総会が開催され、契約講を軸とした震災前の暮らしをモデルに、波伝谷は新たな暮らしの構築に向けて出発することになるのである。

暮らしの基盤の再構築と問題点

一方、生業については、5～6月になると残った船を使って海の調査やがれきの撤去作業が、これと並行して7月にはワカメやカキの養殖再開に向けての準備もはじめられる。撤去作業が一段落ついた2012年2月には「がんばる養殖」が開始するのである。これは、2011年度第3次補正予算により措置された対策で、震災で壊滅的な被害を受けた被災地域の養殖業について、共同化による生産の早期再開と経営再建の取り組みに対して支援を行う事業である。

そもそも、この話はすでに8月～9月頃には話に出ていたようで、採用するに当たっては相当混乱し、なかなか結論は出なかった。特に問題となったのは、集落を単位とした共同作業を前提としていた点であった。震災前の波伝谷の養殖業は個人経営に近いもので、それが共同作業による給与制になることは、同じ養殖業といっても転職に近く抵抗があった。それでも、採用したのは養殖資材や船の提供、赤字の補填のほか、事業終了後すべて受け取ることができるからである。激甚災害の補助は、立替払いで割合も低く、すぐに仕事を始めようとする、これしかなかった。さらに、実際に動きはじめると、各家の方法がぶつかり合うことになる。効率化をめざした共同作業化が、逆に地域の結束を崩すこと

になったのである。

以上のように、東日本大震災は、波伝谷の人々の暮らしの基盤のすべてを奪い取り、契約講等の休講や遠隔地避難など、地域を結びつける組織や場も失った。しかし、波伝谷仮設住宅の建設、高台移転に伴う契約講の再開など、震災前の暮らしをモデルとして生活の再建を目指すとする。これに対し、支援事業は「復興」という名の下で、外部の力でこれとは異なる方向に導くものであった。産業のみ見て、それを支える暮らしのあり方は考慮されなかった結果、再び結束し再出発しようとしていた人々に混乱を生じさせたのである。

春祈禱の「復活」

このような中、春祈禱復活の話が持ち上がる。ある人が混乱の中、震災前の暮らしを思い出して涙を流したという話が伝わり、若者たちの間で今の波伝谷の人々を結びつけるのは春祈禱しかない、もう一度やろうということになるのである。

震災当時、獅子頭は無事だったが、それ以外の道具類すべてが津波に流され、これをどうするかが課題となった。若者たちは外から支援を募るより、波伝谷の結束を図るため、地域内でお金を出し合って復活しようということで、2012年1月には有志で決起集会も開かれた。一方、若者たちの動きを知った契約講の講長をはじめとする三役は、被災した中での費用負担は厳しく、やはり支援は必要だと考え、若者たちとは別に動き出す。両者の考えの違いもあって、時には混乱することもあったが、最終的にはすべてがそろう、本来より1か月遅れの2012年4月15日の戸倉神社の春祭りの日に行われることになった。

当日は、波伝谷仮設住宅の集会所に集合、戸倉神社に向かい参拝、東側の境に移り神事と獅子舞、波伝谷の人も住む津の宮仮設住宅、戸倉漁協の仮事務所を経て、震災後共同避難生活を送った志津川自然の家、そのグラウンド仮設住宅、ボランティアが多く手伝う小山漁業部を経て、波伝谷仮設住宅で昼食。その後、魔王神社、水戸辺の仮設住宅、戸倉中学校仮設住宅を経て、西側の境で舞った後、波伝谷漁港で榊を海に流し、戸倉神社に戻り参拝後解散となった。各仮設住宅では、神事と獅子舞が奉納され料理も振る舞われ、特に波伝谷仮設住宅では女性たちが食事を準備し、男性も含めて多くの人が集まり、震災後初めて顔を合わすという人もいて、和やかな雰囲気の中で楽しそうに笑顔で歓談する姿は、震災前に戻ったかのようで、とても印象的であった。

このように、震災およびその後の復興支援事業の混乱の中、波伝谷の人々を再び結びつける機会として、震災前の春祈禱が活用されたのである。このような例は、他の被災地でもみられ、報道等により民俗の力やコミュニティの強い結びつきといった震災前からの連続性で取り上げられることが多かった。し

かし、実際には震災による暮らしの喪失、復興政策による混乱の中、震災前の暮らしを活用する形で、まさに震災状況下への対応として新たに創り出されたものだったのである。

(2) 被災地の現状をいかに理解すべきか

震災後、2年以上経つと、がれきも片付けられ、養殖業や漁業など主たる生業も徐々に回復し、復興が進んでいるかのような報道が増えてくる。一方、被災地を歩いていると、「何も変わってない」「復興はほとんど進んでいない」といった話が至るところで聞かれる。被災地の今をいかに理解すべきか。波伝谷地区での調査により得られた知見は、以下の通りである。

震災後2年目から3年目までの状況

「がんばる養殖」も2年目に入ると、以前に比べ落ち着きはじめる。これは、何か特別な方法で解決したわけではなく、違いを許容しなければ作業が進まないことから、とりあえず状況に合わせていくうち、以前ほど矛盾点が気にならなくなっただけのことであった。さらに、カキむき場までの移動のバスの中は非常に盛り上がるそうで、まさに作業自体が人々の交流の場ともなっていく。全体的にみると、開始当時に比べ、現状に合わせ協調し、利用する例も出てきた点は押さえておく必要がある。また、2011年にはできなかったウニやアワビの開口も、2012年には再開され、矛盾をはらみつつ、波伝谷においても復興に向け順調に進んでいるようにも見える。

農業でも、農地の整備や、「農と福祉の連携によるシニア能力活用モデル事業」を活用したおばあさんたちの野菜作りがはじめられるなど、再開に向けて動き出している。

一方、高台移転であるが、波伝谷地区内では2か所に集団移転の場が設けられるほか、個人で再建する例が数軒、また南三陸町が建設する復興住宅に移るといった人もいる。ただ、集団移転に契約講は関与せず、移転先ごとに別に集まって相談し、行政との折衝はその代表者が行っている。この段階では、どうするか迷っている人もいて、流動的であった。

このような中、震災後2度目の契約講の春の総会と春祈禱も行われたが、契約講の総会は本来の日程より1週間遅れで開催され、前年に比べて出席率も低く、高台移転にも関与していないことから、存在意義を失うといった声も出はじめるほど、寂しいものであった。

春祈禱も前年度に倣い、4月21日に行われる予定であったが、契約講の総会では本来の日程に戻すべきという声も聞かれ、震災後のあり方に違和感を持つ人も出はじめてきた。また、悪天候になったため、契約講三役の判断で翌週に延期となったため人も揃わず盛り上がりにも欠け、「もうなくなってしまったのでは」といった声も聞かれるほどであった。

このように、震災後2年目を迎えると落ち着きはじめたように見えるが、これは復興政

策下での暮らし、つまり震災後の生活環境に
適応した結果であった。この点からすれば、
特に2年目の春祈祷が盛り上がらなかったこ
とは注目される。震災後の春祈祷は復興政
策下の混乱を背景に行われたものであった。
しかし、課題は多いものの、その状況に慣
れの中で、存在意義が薄れてきた結果なか
なか盛り上がり、また落ち着いていく中で
震災前の春祈祷との違いが目立つように
なってきたのではないか。高台移転もは
っきり決まっていなかった段階であり、
被災地の2年目から3年目にかけては、
厳密に言えば、まだまだ復興政策・震災
状況下にあったのである。

4年目を迎えて

しかし、波伝谷地区も4年目を迎えると、
大きな変化が見え始めてくる。これからの
コミュニティをどうするかという話が、さ
まざまな機会で見られるようになったので
ある。契約講の総会では、役員に若い世
代を入れることになり、2015年には秋
の総会も実施する予定で、ここでは契
約講に所属していない人も参加し、これ
からの波伝谷をどうしていくかが話し合
われることになっている。

また、春祈祷も、2014年度から新た
に若い世代を取り込みはじめ、2015年
には獅子舞の中心が世代交代すること
になった。震災状況下から新たな段階
に入ったのである。

このような変化の背景には、高台への
集団移転先の造成が完成し、家も建ち
はじめたことが大きいものと考えられ
る。これからの暮らしを具体的に考
えることができるようになってきたので
ある。

これについては、兵庫県淡路市旧北
淡町で調査した際、震災状況が終
わったと感じたのは、何によってか
について聞いた際、やはり自宅を再
建した時ということであったが、自
分の家が建ちはじめるといのは、
被災状況からの大きな転機である
のではないかと推測される。

いずれにしても、被災地はやっと
新たな暮らしに向けての出発段階に
入ったといえるのではないか。では、
なぜそれ以前に復興が進んでいると
錯覚してしまったのか。それは、災
害だけを軸に被災地を見ているから
である。たしかに、津波やがれきの
映像はインパクトがあり、そこに
引きずられてしまいがちであるが、
今回の震災が被災地の人々に対し
て一番ダメージを与えたのは、これ
により暮らしの基盤が根こそぎ破
壊されたことである。このことは、
被災地の動きを考える際、災害だ
けを軸にして分析すると見誤って
しまうことを示している。復興支
援政策が終了しどう自立していく
のか、また高台移転後コミュニティ
をどう作っていくのか、被災地
では模索の日々が続く。これが、
まさに4年目を迎えた被災地の
現状であり、それゆえ、実は
今後の調査こそ極めて重要だとい
えるのである。

(3) 被災体験を継承するための課題

震災から4年以上が過ぎ、被災体験を
どう伝えていくかが大きな課題とな
りつつあることが、報道等で伝えら
れている。本研究では、阪神淡路大
震災で大きな被害を出した神戸市
長田区と、「稲村の火」で有名な和歌
山県有田郡広川町で、現地の研究
者とともに回る機会を得た。その際
、気づいた点として、今回案内して
いただいたのは、震災や津波に関
する場所を中心とするものであ
ったが、彼らは災害のみならず、
広く地域の歴史や暮らし全体に関
心をもっていたという点であった。
言い換えれば、被災体験をいかに
継承するかという課題の解決方法
の一つとして、それだけを対象と
するのではなく、地域の歴史や暮
らしの中にいかに位置づけ、その
中で継承していくかが重要な
のではないかということである。
さらに、このような地元研究者
の育成も、被災体験の継承にと
って大きな課題となってくる。

ただし、これについては、彼らがど
のような関心をもって災害伝承と
関わるようになったのか、または
地域の歴史や暮らしに関心が
広がっていったのか、もう少し
詳細かつ具体的に調査する
必要があり、また他の地域の
事例等もみていく必要もある
ことから、引き続き検討してい
ければと考えている。

以上、本研究で得られた知見のうち、
代表的なもの3点について紹介
したが、まだまだ課題も多く
残されていることから、今後
も引き続き調査研究してい
ければと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び
連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

政岡伸洋、地域の暮らしと復興の
課題、学術の動向、査読無、18-12、
2013、33-39
DOI :

http://doi.org/10.5363/tits.18.12_33

〔学会発表〕(計6件)

高倉浩樹、政岡伸洋、木村周平、
菅豊、塚原伸治、何ができて、
何ができないのか 『無形民俗
文化財が被災するということ』
からつかみとる課題、現代民俗
学会第24回研究会、2014年7
月26日、東京大学(東京都・
文京区)

政岡伸洋、被災地の今をいかに
理解すべきか 宮城県本吉郡南
三陸町戸倉波伝谷の事例より、
日本民俗学会第65回年会、
2013年10月13日、新潟大学
(新潟県・新潟市)

政岡伸洋、復興の名の下で何が
起こっているのか 宮城県本吉
郡南三陸町戸倉波伝谷地区の
場合、日本文化人類学会第47
回研究大会、2013年6月8日、
慶応大学(東京都・港区)

高倉浩樹、岡田浩樹、木村敏明、
菊地暁、沼田愛、小谷竜介、
政岡伸洋、菊池健策、齋

藤三郎、沼倉雅毅、民俗芸能と祭礼からみた地域復興 東日本大震災に伴う被災した無形の民俗文化財調査から、東北大学東北アジア研究センターシンポジウム、2013年2月23日、東北大学(宮城県・仙台市)

政岡伸洋、民俗行事の復活とは何だったのか 宮城県本吉郡南三陸町戸倉波伝谷の春祈禱の場合、国立民族学博物館共同研究「災害復興における在来知 無形文化の再生と記憶の継承」第4回研究会、2013年2月15日、東北学院大学(宮城県・仙台市)

政岡伸洋、震災後の暮らしの再建過程と民俗学の課題 宮城県南三陸沿岸の一村落の事例から、日本民俗学会第64回年会、2012年10月7日、東京学芸大学(東京都・小金井市)

〔図書〕(計2件)

高倉浩樹、滝澤克彦編、政岡伸洋ほか、新泉社、無形民俗文化財が被災するということ 東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌(「震災後における民俗の活用と被災地の現在 南三陸町戸倉波伝谷の場合」第2部無形民俗文化財と地域社会の復興をめぐるパネル討論)の司会部分を担当、2014年

総合観光学会編、政岡伸洋ほか、同文館出版、復興ツーリズム 観光学からのメッセージ(「なぜ民俗行事は復活したのか その活用に向けて」を担当)、2013年

〔その他〕

(1) 市民向けの成果報告

政岡伸洋、震災からの暮らしの3年間をどのように見ればよいのか、東北学院大学文学部歴史学科民俗学研究室・科学研究費補助金基盤研究C「東北地方における民俗の展開と東日本大震災」主催映画上映会&講演会「地域の営みをいかに描くか 震災前の暮らしと被災地の今をめぐって」、2014年9月20日、東北学院大学(宮城県・仙台市)

政岡伸洋、祭礼の見方・考え方 盛岡八幡宮例大祭の山車行事を中心に、もりおか歴史文化館特別講演、2014年2月9日、もりおか歴史文化館(岩手県・盛岡市)

政岡伸洋、震災後の民俗行事の意味を考える 南三陸町戸倉波伝谷の事例から、ワークショップ“地域をつなぐ まつりと芸能”(宮城県被災文化財調査出張成果報告会 in 気仙沼) 2013年11月3日、気仙沼中央公民館(宮城県・気仙沼市)

政岡伸洋、宮城県における盆踊りと被災地支援への活用の意義、やりましょう盆踊りシンポジウム、2013年7月21日、せんだいメディアテーク(宮城県・仙台市)

政岡伸洋、東北学院大学歴史学科創設50周年記念事業・文学部歴史学科第16回公開講座「歴史の中の死生観」、2013年7月3日、東北学院大学(宮城県・仙台市)

政岡伸洋、被災地における民俗行事の復

活とその背景を考える、佛教大学開学100周年記念「ありがとうプロジェクト」歴史学部講演会「民俗文化財の保存と継承をめぐる諸問題」、2012年11月23日、佛教大学(京都府・京都市)

(2) 他地域の研究者との研究交流会(一般公開)

政岡伸洋、「復活」した被災地の民俗行事からみえるもの 宮城県南三陸町戸倉波伝谷の春祈禱の場合、歴史資料保全ネットワークわかやま・「東北地方における民俗の展開と東日本大震災」研究プロジェクト研究交流会「被災地に向き合う・災害に備える 歴史学と民俗学・人類学との対話」、2014年6月15日、和歌山県立博物館(和歌山県・和歌山市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

政岡 伸洋(MASAOKA Nobuhiro)
東北学院大学・文学部・教授
研究者番号: 60352085

(2) 研究協力者

岡田 浩樹(OKADA Hiroki)
神戸大学・国際文化学研究科・教授
小谷 竜介(KODANI Ryusuke)
東北歴史博物館・学芸員
加藤 幸治(KATO Koji)
東北学院大学・文学部・准教授
蘇理 剛志(SORI Takeshi)
和歌山県・教育委員会文化遺産課・副主査
沼田 愛(NUMATA Ai)
東北学院大学大学院・博士後期課程在籍
遠藤 健悟(ENDO Kengo)
東北学院大学大学院・博士前期課程在籍
大沼 知(ONUMA Tomo)
東北学院大学大学院・博士前期課程在籍